



發行日 五月、十五日、廿五日
定價 一月十錢、三月廿錢、半年五拾錢、一年九十錢
代用増 二圓四十錢
廣告料 特別欄 十二行一圓、普通欄 金一圓五十錢、銀一圓四十錢
發行所 東北實業新聞社
編輯印刷人 遠藤 林 藏

黄金の化け物退治

銀行會社重役論

銀行不安は經濟界の大障礙である經濟界の恢復を求むる前に先づ經濟界の健全を求めねばならぬ
源泉乏しくして何ぞ末流の滾々を求め得べき資金調達の源泉は金融機關である銀行である銀行の健全を求むるが何事よりも急務である

現在の社會状態はどうであるか凡ての點に於て腐敗墮落實に唾棄すべきである
銀行は資本家の爲めの銀行で貧乏人の役に立たず銀行會社の重役は黄金の化物
思想界の攪亂者が多い、現代重役の暴富振り云つて或る人はこう語つて居た

良品廉賣に勝る商略なし
確實敏捷は生命なり
和洋銅鐵
金物問屋
磐城セメント特約販賣所

屋商店
電話 九番 一三九番
振替貯金口座東京一〇九九六番

磐城銀行合併に就て

平銀行果して誠意ありや

磐城銀行は去月廿二日より平銀行の底意は果して奈
休業し鋭意整理に當り行員邊にあるか疑問にせられて
日夜兼行の努力を拂つてある又仄聞する處によれば

山崎 登君

抱が大切である辛抱すれば城財界の柱石となり、幾多
此處に自然に金が生れる、の事業にも關係し、東奔西
其金で以て事業をする、成走其の活動振りは精力の弱
功する迄辛抱する、辛抱する者の眞似得ない所である

當面の人

中野甲藏君

働きのある者は何處までも
授ける、そして、其材幹を
ある、併し彼は噂ほど悪辣を膨脹させた手腕は豪いも
人格を疑はれるやうな事が無論非難が多いが郡南政友
嫌があり、餘り善く云はれ
ないのである、けれども磐



偽證で告發さる

平銀行有賀、端山
外二名を相手取り

大正九年八月より民事訴訟の兩氏を参考人として取
事件で係争の平信託阿部調への結果其當時紙片に認
思憂の貸借關係は數回に亘めた覺書が紛争の種となり
り辯論ありたる永年の事件此度小野澤辯護士代理とな
も最近に至り又々問題となり有賀幸太郎、端山正男外
り最後に阿部忠愛が平信託二名を相手取り告發した事
へ返濟の五千三百圓を平銀件の内容及覺書の全部は紙
行内に於て差引取引せるが面の都合により次號に……
其當時立會人たる端山、有

磐越銀行頭取 中野甲藏氏の迷惑

磐越銀行頭取中野甲藏氏はして彼れの信譽を傷け、の
磐越銀行休業以來磐越財界みならず陰に糸を曳いて物
のため甚だ憂慮すべき問題資の供給をさへ宣傳する馬
なりとして同行の整理に就鹿者あるに於ては惡むべき
て公正を出發せる立派な意輕舉盲動と云はねばならぬ
見を洩されたが同業者に對中野氏は此の財界不安に直
する營業道德斯くあるべき面して如何にせば安定を促
ものであると彼の人格の高進する事が出来るかと日夜
潔なるに感じた然るに一方考慮しつつある愛郷の士に
平銀行系とも見らるべきも向つて惡罵する如きは慎ま
のが營業道德の感念に乏しねばならぬ、次に旬刊の關
く彼中野甲藏氏は平町旬刊體も同氏より援助或は相談
紙よりなる財界安定促進會を受けたる事なし茲に一寸
の團體に援助せる如く吹聴斷つて置く。

謹告

帳簿整理ノ爲休業中ノ處尙未了ニ付
更ニ六月廿六日ヨリ七月十六日迄休
業仕候

昭和三年六月廿六日

株式會社

磐城銀行

株式會社 田村實業銀行

頭取 永山 徳一
本店 田村郡小野新町
出張所 石城郡川前村

大藏大臣免許

磐城無盡商會

會長 小宅嘉久治
本店 石城郡植田町
支店 平町字中町

株式會社 東部電力 平營業所

車白治一

農工銀行平支店長

河西八十治

高橋龜松

平町白銀町

木田織江

木田織江

醫師

藤沼平次郎

平町紺屋町

醫學士

高久忠

平町田町

澁澤清一

古川傳一

醬油釀造元

大平喜治

植田町

齒科 醫

森合芳男

植田町

下宿部